

自然に学び、先人に学ぶ

No.6 俯瞰して観る、そして、考え、行動する

*何をしたいのか(目的)が解らない

*知っていればできるものではないが、知らないと何もできない

(努力すれば成功するとは限らないが、努力しないと成功することはない)

*“欲しい”と“必要”はちがう

*人生の要諦は『知行合一』(王陽明)

情報断食のススメ

断食とは？食物をたつこと。宗教上の慣習として、また祈願・抗議などをする時に、一定の期間食物を食べないこと。(広辞苑)

仏教語の中に、「有漏智(うろち)」と「無漏智(むろち)」という言葉があります。

「有漏智(路)」とは、煩惱をもつ人間の世俗的な智慧。

「無漏智(路)」とは、すべての煩惱を離れた聖人の智慧。

とあります。

(注：漏とは仏教で、漏れ出ずるもの、汚れを意味し煩惱のこと)

立ち止まり、一歩引いて私たちの日常を眺めてみますと、朝起きてから床に就くその間際まで、マスメディアの代表であるTVから流れてくる洪水のごとき情報に翻弄されているように見えます。最近では、TVや新聞、雑誌と並んでインターネットから得られる情報が増大しています。とても便利な情報化社会と言えますが、その情報の内容の質(価値)や真実性(信憑性)について考えることは少ないのではないのでしょうか？朝から晩まで他人(ある目的を持った第三者)の創った情報を生活習慣的に受け止め、受け取り、そして右へ、左へ動かされ振り回されているように見えます。毎日何時間TVを観ても、いくらコンピュータを駆使して情報を集めても、人間が感じ受け取れる自然の中の情報に優るものはありません。

“ひとりで生まれ、只ひとり黄泉に赴く”自分にしか歩めない一度しかないこの自分の人生を改めて看(感)得するためにも、『断食』と『情報断食』をお勧めします。

“放てば掌に盈てり”今、大事と思い必要と思い込んでいる情報ソースを一度断ち、捨て、離す(断捨離)“ことで、自分が自分らしく生きていくために、本当に価値のある情報(聲)が見えてきて、活かすことができるかもしれません。

人間のなす行為は有漏であり正に「有漏智」でいっぱい。僅かでも「無漏智」に近づいて清々しい日々を過ごしたいと願うひとりです。

株式会社コンタクト

〈参考文転載〉

今、仙台は、桜が満開である。桜が満開に咲き誇るのを見て「きれいだなあ。」と率直に感じる。そこでその美しさの中で、自分の心をいっぱいにする。しかし、その後「この満開の桜が雨によって散るのはもったいない。」と思った瞬間、心の中では、既に雨が降りだしている。「きれいだなあ。」と感じた今、この時を大事にする生き方が、大切である。

人は、日々の出来事の中で喜び、怒り、哀しみ、楽しんでいるが、これらの喜怒哀楽は、すべて知識から発している。喜怒哀楽のすべては、相対性を以っており、すべてのものが常に変化するもので、無常であり、不変性を持たない。本当に日々を生き切るということは、知識という言葉でいったん翻訳せず、ただ観て感じたままで生きることが、大切である。

仏教には、無漏智（むろち）と有漏智（うろち）という概念がある。有漏智とは、人間の限られた漏れのある知恵、知性、判断力をいう。有漏智は、完璧ではなく、必ず漏れる。人間の考えられる限りを尽くす事、人知を尽くす事には、限りがある。有漏智からは、パプニングまでは、計算できない。襖の向こうが見えない。三年先が見えない。限られた漏れのある知恵が、有漏智である。漏れのない知恵が、無漏智である。パプニングまでをも計算し尽した般若の知恵、パーンチャである。人間の知性、判断力、合理主義は、有限だが、般若の知恵、無漏智は、無限である。この、般若の知恵、無漏智が、仏教、禅という悟りである。現代社会は、いくらコンピュータを駆使して、情報を集めた合理的な判断でも、必ず漏れがある。漏れがあるという事は、未来が分からない。

しからば、どうしたら人は漏れのない知恵が得られるだろうか。無漏智とは、あらゆる執着を、脱ぎ捨てて、心の中が真に、解放された状態での知恵をいう。精神の動揺が全くなくなって、正しい智慧が生まれた状態である。もはや、不安というものに悩まされることはない。この時、無漏智が生まれる。有漏智には、煩惱があるが、無漏智には、煩惱の汚れが一切無く、清浄である。仏教でいう無漏智を得るとは、解脱、悟りと同義である。神道では、考えるは、神帰るといふ。人間が、雑念を取り去り、無心になる、色即是空、空即是色の心の状態に到達できた時、己を超えた知恵、無漏智の境地に達するのでは、なかろうか。無漏智の境地は、何より天地に対する敬虔な思いが重要であると考え。人は、無漏智の境地に、いつになったら達する事ができるのだろうか。

（鈴木誠一氏）